

インターネット時代の医学・医療情報とライブラリアンの役割

北澤 京子

I. はじめに

イギリスの British Medical Journal Publishing Group (BMJ PG) が最近、「Best Treatments」(www.besttreatments.org/) という新しいウェブサイトを立ち上げた。これは、BMJ PG が1999年に創刊した「Clinical Evidence」をベースに、治療法や薬剤の説明などを加えたものだ。

「Clinical Evidence」では、ある疾患について「診療上の疑問」を設定した上で、様々な治療法に関する質の高い文献（主にシステマティック・レビューとランダム化比較試験）を徹底的に検索し、エビデンスのレベルに応じて有益性の度合いがランク付けされている。この日本語版¹⁾の編集作業を担当している関係で、9月に BMJ PG の担当者が来日した折に、「Best Treatments」のことを教えてもらった。

興味深いのは、この「Best Treatments」では、医師と患者の両方をはじめから視野に入れていることだ。トップページには、「男性の写真（患者向け）」と「女性の写真（医師向け）」が並んでおり、好きな方を読むことができる。患者向けの内容は簡潔にまとめられ、医学の専門用語は使われていないが、骨子は医師向けのものと変わらない。医師だけでなく、患者自身にも、質の高い臨床試験の結果に裏付けられた、科学的根拠に基づく医療（エビデンス・ベースド・メディシン：EBM）を選択してもらおう

という姿勢が伝わってくる。さらに、「Personal Experiences」として患者自身やケア提供者の声も収録されており、ナラティブ・ベースド・メディシン（NBM）への配慮も感じられる。

医学・医療情報は、専門性の極めて高い特殊なもので、医師と患者の間には「情報の非対称性」が存在すると言われてきた。確かに、医学を専門的に学んだ医師と、基本的には医学の素人である患者では、知識や経験の点で差があるのは当然だ。

しかし一方で、インターネットの発達により、この差が少しずつ縮まっているのではないかと感じる。1997年にアメリカの国立医学図書館が世界最大の医学文献データベース Medline を「PubMed」としてインターネットでだれもが無料で検索できるようにしたことは、世界中に大きなインパクトを与えた。今や、医学専門誌に掲載されたばかりの最新の文献も、内外のマスコミが伝える医学記事も、一人ひとりの患者の思いまでもが、読む側が医学・医療の専門家であるかそうでないかに関係なく、インターネットで区別なく提供されるようになっている。その代わり、中には誤解を招きかねないような内容や、明らかな宣伝も混じっている。

医学・医療情報の提供という点で、インターネットを抜きに考えることはもはやできない。マスコミの果たすべき役割も、大きく影響を受けている。

II. マスコミは信頼されているか

昨年9月、アメリカのメイヨー・クリニック

きたざわ きょうこ：日経 BP 社 日経メディカル編集部
副編集長
kitazawa@nikkeibp.co.jp

で、「医学とメディア(Medicine and the Media)」と題する会議が開かれた^{2) 3)}。メイヨー・クリニックでもこのようなテーマでの会議は初めてだったというが、医師、医学研究者、医学雑誌の編集者、ジャーナリスト、さらに行政や広報会社の担当者など、計400人以上が参加した。メディア関係者としては、世界的に有名な医学雑誌である New England Journal of Medicine 誌や Lancet 誌の編集者をはじめ、ニューヨーク・タイムス紙や CNN といった一般メディアからも、医学ニュースの担当者が集まった。

「患者は誰の情報を信頼するか」と題されたセッションでは、ギャロップ社世論調査部門のフランク・ニューポート氏が、米国市民に対して行った健康・医学ニュースに関する調査の結果を発表した。情報源として最も多くの人が挙げたのは医師で、回答者の70%に上った。次いで多かったのはテレビ(64%)で、米国でもテレビの影響が大きいことが明らかになった。この調査では、インターネットを挙げたのは37%にとどまっていたが、おそらく今後増えていくだろう(図1)。

この同じ調査では、情報の信頼度についても尋ねていた。最も高かったのはやはり医師(93%)、次は看護師(83%)で、資格を持つ医療従事者は市民からの信頼も厚いことが裏付けられた。マスコミ情報は信頼度としては医療従

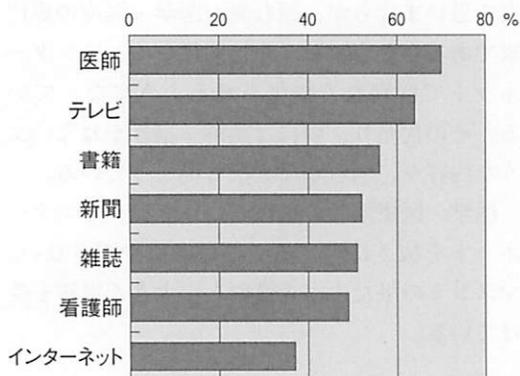


図1. 米国市民の健康・医学に関する情報源 (ギャロップ調査)

事者を下回り、書籍、新聞、雑誌、インターネットの順だった。テレビは調べた中では最も低かった(59%) (図2)。

考えさせられたのは、マスコミ情報が「意思決定に役立つ」と答えたのは50%にとどまり、ほぼ同数の45%が「むしろ混乱する」と答えていたことだ。こうした結果からは、少なくとも米国市民にとっては、医療従事者から直接得る情報に比べて、マスコミ情報の信頼度はやや劣ると言えそうだ。

Ⅲ. 医学論文とマスコミ報道のニュアンスの違い

この会議では、具体的なテーマの一つとして、乳癌のマンモグラフィー検診の有効性についての議論が取り上げられた。

マンモグラフィー検診を行っても、乳癌による死亡率を減らす効果はないというメタアナリシスの結果が、Lancet 誌に初めて掲載されたのは2000年1月⁴⁾。2001年10月には、同じ著者から追補版のメタアナリシスも発表された⁵⁾。しかし、著者らの出した結論については、医学界の内部でも様々な意見や反論があった。

ところが、このメタアナリシスの内容がニューヨーク・タイムス日曜版(2001年12月9日)の1面に掲載されると、同じような内容の報道が次々と別のメディアにも広がっていったとい

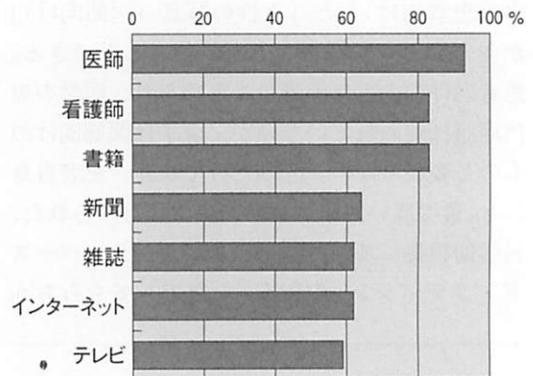


図2. 米国市民の健康・医学情報の信頼度 (ギャロップ調査)

う。その結果、医学界内部の論争が十分に伝わらない結果となった。この現象について会議では、医学関係者の側から、報道が正確さに欠けるという指摘があった一方で、ジャーナリストの側からは、議論がアカデミックすぎてついていけないという反論もあった。確かに、研究が行われた年代も場所も異なる複数の論文のうち、どれを選び、どのようにメタアナリシスとしてまとめるのが適切かといったことは、かなり専門的な話に違いない。

似たようなことは他にもある。昨年アメリカで発表された、更年期女性に対するホルモン補充療法（HRT）の意義についての論文はよい例だろう。2002年7月、アメリカの国立衛生研究所は、WHI（Women's Health Initiative）が行った大規模ランダム化比較試験⁶⁾の結果を受け、試験の一部を中止すると発表した。HRTにより冠動脈疾患イベントや乳癌が増えたというのがその理由だった。

しかし、この件についてのわが国のマスコミ報道では、「HRTは危険」というメッセージが一人歩きしてしまった感があった。HRTを行っている医師の元には、「HRTを続けてもだいじょうぶか」といった患者からの問い合わせが相次ぎ、新たにHRTを始めようという患者はすっかり減ってしまったという。

しかし、論文をよく読むと、冠動脈疾患イベントの増加は、1万人・年当たり7（HRT群37に対してプラセボ群30）、乳癌の増加は、同じく1万人・年当たり8（HRT群38に対してプラセボ群30）で、それほど大きなものではなかった。また、米国では心疾患や乳癌の発症率が日本に比べて高いことを考え合わせれば、少なくとも日本ではそんなに大騒ぎするほどのことではなく、HRTが更年期症状の緩和に役立つというメリットを過小評価すべきではないという意見もあった⁷⁾。

IV. 専門家と非専門家をつなぐ役割

マスコミの情報は基本的に取材に基づいてい

る。医学・医療という専門性の高い分野では、取材先も専門家であることが多い。

どの分野でも同じだろうが、医学・医療分野でも専門分化が進む一方だ。医師は医学の専門家であることには間違いないが、医師であれば医学のあらゆる分野に精通しているとはいえない。取材する場合は、「何を聞くか」と同時に「だれに聞くか」が極めて重要だ。

難しいのは、ある特定分野の専門家には、専門家であるがゆえの偏り（バイアス）が存在する点だ。専門家バイアスと呼んでもよいかもしれない。しかも悪いことに、専門家自身が、自分の主張には専門家バイアスが含まれているかもしれないということに気がついていない。

例として、米国で行われたあるアンケート調査の結果⁸⁾を挙げてみたい。この調査では、早期で予後が良いと考えられる限局性の前立腺癌の患者に対してどのような治療法を選択するかについて、泌尿器科医と放射線科医にそれぞれ尋ねた。その結果、泌尿器科医はそのほとんど（93%）が手術の方が優れていると答えたのに対し、放射線科医の多く（72%）は、手術と放射線治療のどちらも同程度に優れていると答えていた。手術の方が優れていると答えた放射線科医は20%しかいなかった。泌尿器科医も放射線科医も、自分の専門領域のことはよく知っており、最新の事情にも通じているので、より優れていると感じるのだろう。自分の専門分野に自信を持って診療を行っていることの表れと言えるかもしれないが、初めにどの科にかかるかによって治療方針がまったく異なるようでは、患者としては納得がいかない。

マスコミによる医学・医療に関する情報に興味があるとすれば、数多くの取材を積み重ねることにより、あることがらを複眼的にみられるということだろう。上の例で言えば、前立腺癌の治療についての記事を書こうとするとき、泌尿器科医と放射線科医の両方に取材すれば、より客観的な情報となることが期待できる。さらに、治療を受ける側の患者の声を聞くことも重

要だ。主治医の前ではなかなか言いにくいことも、第三者になら話して下さるということもある。

インターネットのおかげで、情報を入力することが容易になった半面、情報が多すぎてどれを信用してよいか分からなくなることもあるだろう。様々な方面から広く情報を収集し、その質を見極め、分かりやすい形に整理、加工して提供することにより、専門家と非専門家をつなぐのは、マスコミの役割の一つと言えるだろう。しかしそれは同時に、ライブラリアンが専門性を発揮できる分野ではないかと思う。

医療機関や大学の図書館のライブラリアンはこれまで、主として職員向けの情報収集および情報提供を行ってきた。しかしこれからは、治療を受ける側の患者や、将来患者になるかもしれない一般市民にも視野を広げてほしい。冒頭でも述べたが、インターネットの普及により、この情報は医師専用とか、この情報は患者専用などと情報を分類すること自体、以前ほどの意味を失ってきているのではないかと感じる。

このところ、患者向けの図書室（資料室）を設ける医療機関が増えているが、提供する資料の内容や質を見極め、より信頼度の高い情報を提供するためには、ライブラリアンの参加が望ましい。医学・医療について正確で客観的な知識を一人ひとりが身につけるために、「何」を「どう」読めばよいのかについて、ライブラリアンがアドバイスする場面が、もっと増えればよいと思う。

参考文献

- 1) クリニカル・エビデンス日本語版2002-2003. 東京：日経BP社；2002.
- 2) 北澤京子：医学界とメディアが徹底討論. 日経メディカル. 2002；31(11)：39.
- 3) Lantz JC, Lanier WL : Observations from the Mayo Clinic National Conference on Medicine and the Media. Mayo Clin Proc. 2002；77：1306-11.
- 4) Gotzsche PC, Olsen O. Is screening for breast cancer with mammography justifiable? Lancet. 2000；355：129-34.
- 5) Olsen O, Gotzsche PC : Cochrane review on screening for breast cancer with mammography. Lancet. 2001；358：1340-2.
- 6) Writing Group for the Women's Health Initiative Investigators : Risks and benefits of estrogen plus progestin in healthy postmenopausal women : principal results From the Women's Health Initiative randomized controlled trial. JAMA. 2002；288：321-33.
- 7) 北澤京子：HRTで冠動脈疾患のリスク増. 日経メディカル. 2002；31(9)：26-27.
- 8) Fowler FJ Jr, McNaughton Collins M, Albertsen PC et al. : Comparison of recommendations by urologists and radiation oncologists for treatment of clinically localized prostate cancer. JAMA. 2000；283：3217-22.